

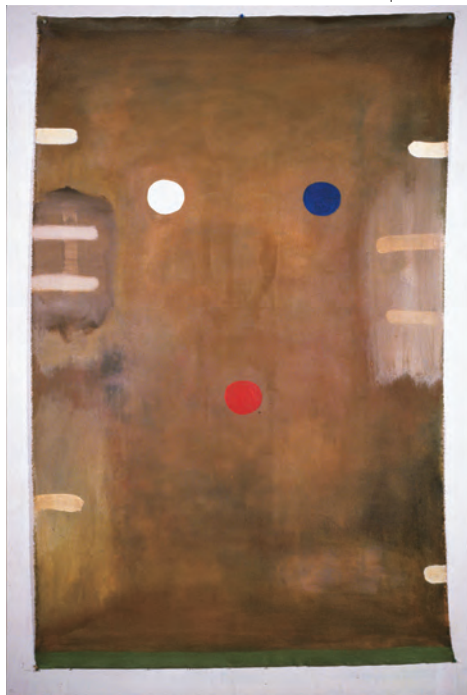
Keisho Okayama 岡山圭昭 (1934-2018)

困難や苦悩の果てに見出した
絵画の精神性と潜在意識のイメージ



左—無題 2015 キャンバスにアクリル
絵具 90.2×41.9cm Photo by Silvia
Ros Courtesy of the Estate of Keisho
Okayama and Perrotin © Estate of
Keisho Okayama

右—赤、白、青 1995 キャンバスにアクリル
絵具 181.6×114.3cm
© Estate of Keisho Okayama



アメリカ西海岸の日系人は歴史に翻弄されたが、岡山圭昭のたどった道もその例に違わない。僧侶の父について、1936年にカリフォルニアへ渡ったが、日本への帰国直前に真珠湾攻撃が勃発。ほどなくして、一家はカリフォルニア州タンフォラン集合センター、のちにユタ州トバース強制収容所へ送られた。戦後、西海岸へ戻ってから差別に苦しめられたうえ、父は日米両方の浄土真宗のコミュニティから冷遇されるという憂き目に遭った。人種や国籍のみならず、心の拠り所であるはずの祈りの場でも日米のはざまで悩んだ岡山が見出したのが、アートだった。

60年代後半に興ったライト&スペースに通ずる初期作品、仏教美術への傾倒、後期の抽象画と、スタイルは変化した。しかし、個人、家族、日系人コミュニティとして直面した困難や苦悩、それに対する怒りと癒やといった精神や思想が、岡山作品の根底にはつねにあると、美術史家・フレッチャー＝コールマンは指摘する。確かに、敦煌をはじめ石窟寺院の壁画に拠った色彩や造形の抽出(《赤、白、青》[1995])、そこからたどりに着いた抽

象表現が、初期のミニマリズム、人物画に見られた実存への静かな懐疑の延長線上にあることには留意する必要がある。また、無駄を避け、素材を繰り返し使う様子は、生活と制作が続きだっただけの家やアトリエのそこここに見受けられるが、¹ 皺のよったキャンパスの際まで塗り込んだ2010年以降の多くの抽象画に、強制収容所で生活せざるを得なかった人々の「Art of Gaman」の片鱗を見るのは私だけだろうか。²

*1—Fletcher Coleman, *Solace in Painting: Reflecting on a Tumultuous Century* (Scala, 2025), 46–50.

*2—Delphine Hirasuna, *The Art of Gaman: Arts and Crafts from the Japanese American Internment Camps 1942-1946* (Ten Speed Press, 2005).

Profile

1934年大阪府藤井寺市生まれ。ロサンゼルスを中心に活動。52年カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)に入学、哲学を学ぶ。56年アメリカ国籍を取得。軍への入隊を志願し、ドイツに2年間駐留。その後、UCLAに戻り、芸術を専攻。62年学士号取得。UCLAほかにて教鞭を執る。主な個展に2023年「Keisho Okayama: Selected Works」(日米文化会館、ロサンゼルス)など。作品は、スタンフォード大学センター・アーツ・センターに収蔵。